



Title	はじめに
Author(s)	加藤, 博文
Citation	新しいアイヌ史の構築: 先史編・古代編・中世編: 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56105
Type	report
File Information	introduction.pdf



[Instructions for use](#)

はじめに

加藤 博文

1. プロジェクトの設置の背景
2. プロジェクトの目的：「新しいアイヌ史」とは
3. プロジェクトの経緯
4. 小シンポジウムにおける議論

はじめに

加藤 博文

1. プロジェクトの設置の背景

北海道大学アイヌ・先住民研究センターは、アイヌ民族および先住民に関する総合的・学際的研究の推進、それらの互恵的共生に向けた提言の実施、多様な文化の発展と地域社会の振興への寄与を目的に学内共同教育研究施設として、2007年に設立された。

北大には、戦前より学内組織として北方文化研究室が設置され、戦中戦後を通じて多くのアイヌ民族に関する研究を蓄積してきた。1966年には、文学部に北方文化研究施設が付置され、そり組織的にアイヌ民族や北方諸民族の歴史・文化研究が推進された。しかし、この施設は1995年には、文学部の改組の過程で廃止され、北方文化論講座となっている。

このような北大における北方諸民族やアイヌ民族に関する歴史文化研究は、様々な領域において高い水準の研究成果を残し、その後の研究に大きく寄与した。また知里真志保教授のようなアイヌ民族出身の優れた研究者の参画を得て、アイヌ語やアイヌ文化史の研究領域をリードしてきたことは広く知られている。しかし一方では、その研究姿勢や研究手法に、「北大人骨問題」に代表されるような必ずしもアイヌ民族のための研究とは評価できない結果を残念ながら招いてきた。

アイヌ・先住民研究センターの設置と同時に企画された国際シンポジウムにおいて当時の中村睦男総長は、大学自身の歴史の中に研究の名の下でおこなわれた「民族の尊厳に対する適切な処置を欠いていてことを真摯に反省・・・中略・・・今後進むべき方向を検討し、自らの責務を果たしてまいりたい」とステートメントを表明した（北大前総長ステートメント：<http://www.cais.hokudai.ac.jp/statement.html>）。このようにこのセンター設置の背景には、上述のような従来の北大におけるアイヌ民族や北方諸民族に関する研究姿勢への反省と、「アイヌ民族を初めとする北方諸民族に関する教育を充実する」（同上ステートメント）と大学の中期計画の具体化の動きがあった。

センターでは、その発足時より研究プロジェクトの柱の一つとして、従来のアイヌ史の見直しの必要性が議論された。日本史の一部や辺境史としてのアイヌ史ではなく、アイヌ民族に軸足を置いたアイヌ民族の歴史の構築の必要性である。幸い2008年度から2011年度までの4年間にわたり、文部科学省特別教育研究経費の配分を受けて、アイヌ民族や世界各地の先住民の歴史や文化、言語、権利に関する幅広い国際比較研究を目的とした「アイヌ・先住民に関する総合的・学際的研究」を実施することが確定した。これを受けてセンター内に学内外の研究者をメンバーとする「新しいアイヌ史構築ワーキング」が組織され、共同研究を進めてきた。

本報告は、4年間にわたり実施した共同研究の成果報告である。

2. プロジェクトの目的：「新しいアイヌ史」とは

2009年に報告された『アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書』では、これまでアイヌの歴史や文化について日本国民の共通の知識となつてこなかったことが指摘されている。また今後の課題として、アイヌの歴史と文化を我が国の歴史と文化の中で確実に把握し、客観的に記述する必要性が述べられている。

アイヌ民族の歴史は、これまで日本史の北方史の領域やアイヌ史という枠組みで、考古学ではアイヌ考古学という視座から研究成果が蓄積されてきた。しかし、学術会議の史学委員会が史学分野の展望として2010年に報告したように、近代歴史学や考古学は、近代国家の成立と揆を一にしており、「国家の歴史」、「国民の歴史」として記述される傾向が強かった。そしてこれまでの日本史研究や日本考古学研究においても、そのような一国史観的色合いが強かったことは事実である。アイヌ民族の歴史は、「国家の歴史」や「国民の物語」という文脈においては、客体的位置づけであり、主流をなす歴史動態に変異を加味する役割として、追加的な位置づけのまま今日にいたっている。改めて指摘するまでもなく、この状況が先に指摘されたアイヌ民族の歴史や文化に対する認識の不足の要因の一つとして指摘できよう。

取り組むべき課題は、明らかである。日本史のための、日本史に豊かで多様な彩りを与えるためのアイヌ史ではなく、アイヌ民族の歴史的成り立ち中心に据えたアイヌ史の語りが必要とされている。同様の視点は日本史の領域のみではなく、考古学においても同様の取り組みが求められる。考古学においても、アイヌ文化の探求は、長らく日本文化理解のための手法であった。また国家形成史の流れを辿る日本考古学の時代区分や語りにおいては、非農耕・非国家形成の北方の社会と集団は、文化的発展に対する停滞性や新たな文化的イノベーションの一方的な受容者として描かれてきた。

「新しいアイヌ史」の取り組みとは、これまで蓄積されてきた、また明らかにされつつある資料を集成し、検討することによりアイヌ民族側の立ち位置からの歴史として読み直すことである。そのためには、従来の概念や資料評価の見直し、新たな理論的アプローチに加えて、考古学から歴史学へと連なる時代区分の見直しも必要となってくる。ワーキングにおいては、これら二つの課題を中心に据えて、議論を重ねることとした。

3. プロジェクトの経緯

プロジェクトのメンバーとしては、以下の学内外の研究者が参画した。

安達登（山梨大学医学部）、石田肇（琉球大学医学部）、小野有五（北海道大学大学院環境科学研究院）、加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、木山克彦（北海道大学スラブ研究センター）、佐々木利和（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）、瀬川拓郎（旭川市博物館）、谷本晃久（北海道大学大学院文学研究科）、出利葉浩司（北海道開拓記念館）、中村和之（函館高等専門学校）、マーク・ハドソン（西九州大学リハビリテーション学部）、蓑島栄紀（苫小牧駒沢大学国際文化学部）（以上、五十音順）。

プロジェクトメンバーによる研究会においては、従来の時代区分論への批判的検討を中心に、今どのようなアイヌ史を語るができるのかが議論された。議論を通じて明らかにされたの

は、1) どこにアイヌ文化の成立の契機を見いだすのではなく、通史としてのアイヌ文化の成立過程を描き出すこと。2) 日本史における語り口とは異なる独自の歴史叙述の枠組みの構築の必要性。3) 領域横断的なアイヌ史の検討。4) 非アイヌ民族である研究者によるアイヌ史や北海道史の語りであることの自覚。5) アイヌ文化を規定するステレオタイプな物質文化資料の定義の見直し。6) 文化評価(歴史解釈)の権利を誰が保有するのか、などの諸点に及んだ。これらの議論は、研究会を通じて繰り返し議論されてきたが、容易に答えが見いだせる課題ではない。

一方、現段階の研究成果の比較研究については、プロジェクトの後半期を使い、ミニシンポジウムを積み重ねながら、その成果の蓄積と課題の共有をはかった。人類学や考古学の知見に基づいての北海道島における集団形成過程の議論については第1回ミニシンポジウムとして、2010年9月3日に開催した。これに続く古代史の領域における比較検討は、2011年2月26日と27日に実施した。中世史の領域については、2011年11月23日に開催した。それぞれのミニシンポにおける報告者およびコメンテーターは、以下の通りである。

第1回小シンポ先史編：

安達登(山梨大学医学部)、石田肇(琉球大学医学部)、木山克彦(北海道大学スラブ研究センター)、増田隆一(北海道大学大学院理学研究院)、山原敏朗(帯広百年記念館)

第2回小シンポ古代編：

瀬川拓郎(旭川市博物館)、武廣亮平(道都大学共通教育部)、田中聡(立命館大学文学部)、松本建速(東海大学文学部)、蓑島栄紀(苫小牧駒沢大学国際文化学部)、八木光則(盛岡市教育委員会)

第3回小シンポ中世編：

中村和之(函館高等専門学校)、秦野祐介(立命館大学文学部)、谷本晃久(北海道大学大学院文学研究科)、関根達人(弘前大学文学部)、北野信彦(東京文化財研究所)、本多貴之(明治大学理工学部)、越田賢一郎(札幌国際大学人文学部)

本報告書においては、これら小シンポジウムにおける基調報告、コメントを収録し、報告している。またアイヌ民族を主体としたアイヌ史の構築のためには、従来の時代区分や文化期設置など概念についても検討が必要であるが、すでに博物館展示や概説書として長年にわたり一般に流布しており、さらに継続的に検討をおこなっている。これらの課題は、新しいアイヌ史の構築のために極めて重要な課題であり、改めてワーキング内での議論の課程を公開していきたいと考えている。

4. 小シンポジウムにおける議論

企画されたシンポジウムは、それぞれ異なる研究者による発表と意見交換が可能となるように構成した。第1回のシンポジウムは、自然人類学からの研究の報告を受けて、考古学的状況との対比、議論をおこなうことを主眼とした。相互に深く関係する領域であるにも関わらず、このような機会は、実に少ない。双方の研究成果をどのように対比しているのかが議論となり、また研究成果の統合についての取り組みの必要性や課題が議論された。このシンポジウムで提

起された課題は、アイヌ民族の形成史をどの段階から議論すべきか、という根本的な問いを考える上で、数多くの示唆を提示する結果となった。ここで提起された課題は、さらに議論を重ねて行く必要がある。

第2回のシンポジウムにおいては、文献資料に地域集団が叙述される段階での集団認定が歴史学と考古学の研究者により議論された。古い時代における集団の認定は、共に間接的な資料からの評価検討となり、古くて新しい課題である。民族や集団の理解については、これらの研究領域のみではなく、より広く文化人類学や社会学なども巻き込んだ議論が必要である。日本列島北部における集団の形成過程は、文字資料と考古学資料との対比を通じて、積極的な仮説提示とその検証という作業が必要とされている。

第3回のシンポジウムにおいては、これまで「アイヌ民族」のアイデンティティが形成される時期とされた中世併行期の様相を考古学と歴史学、さらに文化財科学からのアプローチを交えて議論がなされた。アイヌ民族のエスニシティの形成過程は、ある特定の時期に突如出現する訳でない。長い歴史的過程を有しているのであるが、その中にもいくつかの画期となる重要な転換期がある。その一つが物質文化の様相に迎れることを各発表者の報告は明示している。

以下、本報告に所収した各論考は、これら小シンポジウムにおける報告である。各報告において新しい視座を切り開いてくれた各報告者に深く感謝申し上げる。

参考文献

アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会 2009『報告書』

(<http://www.kantei.go.jp/jp/ingi/ainu/sdai10/siryoul.pdf>, 2012年2月23日アクセス)

中村睦男 2005「前総長ステートメント」『北海道大学シンポジウム 先住民と大学』

(<http://www.cais.hokudai.ac.jp/statement.html>, 2012年2月23日アクセス)

